

広島・三日市遺跡

みつかいち



(乃美)

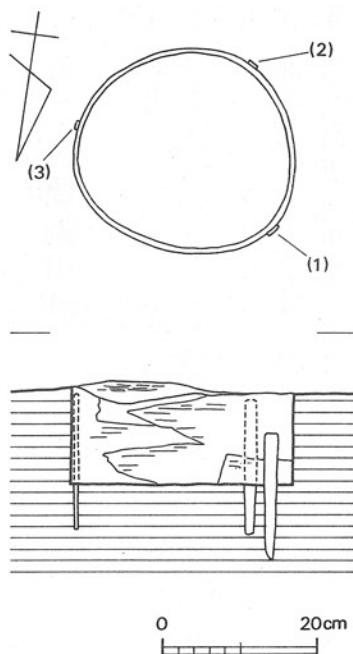
三日市遺跡は、広島県中央部に広がる、世羅台地と呼ばれる起伏

の比較的なだらかな山間の地域に位置している。遺跡は、現在は水田となるいるなだらかな斜面上にあり、すぐ北には江の川の支流である美波羅川が西流している。遺跡の存在する世羅郡には中世初頭に太田荘が成立するが、三日市遺跡は太

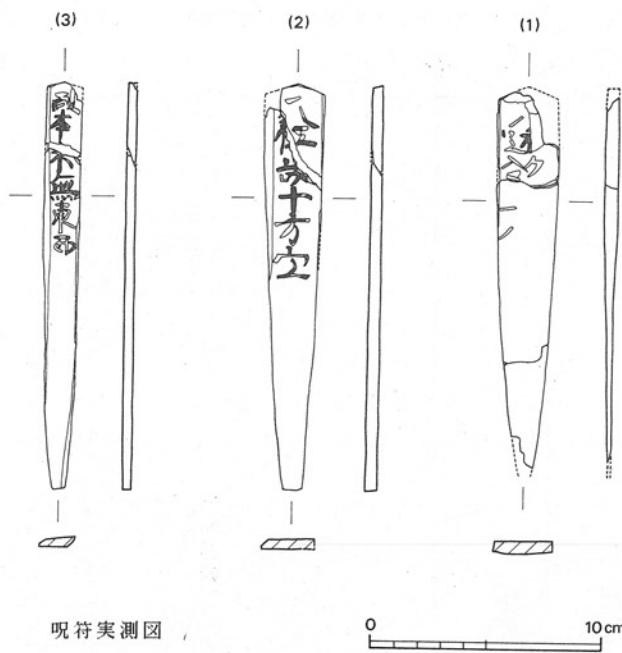
田荘域には含まれておらず、当時の様子は明らかにされていない。遺跡の調査面積は約五〇〇〇m²である。掘立柱建物を想定させる千以上の柱穴を検出した。柱穴は密集している所が数カ所あり、建物が近接して建てられていたことや、何度も建て替えられた様子が窺える。建物の規模は一間×一間や一間×二間のものが多い。柱の間隔も一定しておらず、二~四mと広いものが多い。瓦は全く出土しておらず、瓦葺きの建物はなかつたと考えられる。出土遺物には、土師質土器、陶器などが多く、輸入銅錢、刀剣などが出土した。これに、漆器椀、木筒、曲物、輸入銅錢、刀剣などが出土した。他の遺物から三日市遺跡が成立・存続した年代は、一四~一五世紀であると判断できる。

このような遺跡のあり方や、遺跡のある地域が「三日市」という地名であること、四方に道が通じて往来に便利な場所であったこと、調査区の北西部に恵比寿信仰の跡が残っていることなどから、三日市遺跡は中世後期の市の跡であると推定される。

木筒（呪符）は、土中に埋められた曲物の外側に接して、立てられた状態で出土した。曲物の径は二七~二九cmで、円形に近い。本来は円形であったものが土圧で変形したものであろう。曲物を埋めた穴は曲物の外径にほぼ等しい。曲物の上部は削平を受けていたため高さは不明である。底板はなかつた。埋土は灰褐色粘質土で炭化物の小片を少し含んでいた。いずれの木筒も薄い板状で、文字の書



呪符出土状況図



呪符実測図

いである方を外側にして立てられていた。

8 木簡の祝文・内容

「□迷故□□□」

(166) × 27 × 5.5 051

「□悟故十方空」

179 × 26 × 5 051

「□本来無東西」

179 × 11 × 5 051

それぞれ一字目は梵字であることを確認した。(1)は真言密教の偈文から「□迷故三界城」となる。呪符の配置は、(1)が曲物の西、(2)が南、(3)が東にそれぞれ立てられていた。その配置をみると三方に立てられたようにみえるが、このような状態から考えると、他に「□何處有南北」と記されたものが曲物の北に立てられていた可能

性がある。遺構の性格については、死者への供養とか地鎮などが考えられるが、他に手掛けりになるような遺物が出土しておらず、明らかではない。

なお、呪符の解説については、広島県立歴史博物館の志田原重人氏の協力を得た。

(金近忠昭)